NIDS 防衛研究所
The National Institute for Defense Studies

中国人民解放軍による台湾 ADIZ 進入①　― この 2 年間を概観する ―

地域研究部米欧ロシア研究室　相田　守輝

NIDSコメンタリー
第 246 号 2022 年 11 月 17 日

はじめに

台湾周辺で軍事的プレゼンスを高める中国の言動は、周辺国のみならず、国際社会にとって強い警戒の対象となっている[1]。中国と台湾との軍事力の差は今や明確であり、中国の力に物を言わせる強硬姿勢を受けて、2027 年までに台湾侵攻が生起するのではないかとも懸念されている[2]。

その代表的な中国の軍事行動として、2020 年頃から台湾の防空識別圏（Air Defense Identification Zone：ADIZ）に対し、中国人民解放軍（People's Liberation Army: PLA）の航空機が進入するケースが頻発している[3]。台湾は 2020 年 9 月 17 日からインターネット上でこれら状況を、その都度発信しており、既に 2 年以上が経過している[4]。

本研究の目的は、中国の軍事行動が何を意味しているのかを考究することにある[5]。そこで本稿では、その第一弾として台湾国防部が 2 年にわたり公表してきた全ファクト・データを分析評価することにより、PLA 機による台湾 ADIZ 進入の状況を概観していく。その際、2 年間観測してきた筆者の視点から当時の背景情報などを補足しながら評価してくこととする。

一方、中国の軍事行動には非常に多くの特徴が見て取れる。本稿では、紙幅の関係上、台湾 ADIZ 進入を概

---

1 本稿では、1949 年 12 月に台北に臨時首都を移してからの中華民国を台湾と表記する。

2 United States Senate Committee On Armed Services, *Hearing To Receive Testimony On United States INDOPACIFIC Command In Review Of The Defense Authorization Request For Fiscal Year 2022 And The Future Years Defense Program*, March 9, 2021, pp.47-48, https://www.armed-services.senate.gov/imo/media/doc/21-10_03-09-2021.pdf, accessed by August 26, 2021.

3 本稿で扱う「PLA 機」とは、PLA 空軍、PLA 海軍航空兵、PLA 陸軍等の航空機を指すが、議論の拡散を防ぐため、個別具体的に所属する軍種についてはあえて議論しない。

4 台湾国防部は、ホームページだけでなく Twitter 公式アカウントからも発信を続けている。（"Taiwan Ministry of National Defense maintains an active twitter account (https://twitter.com/MoNDefense/status/1427571314487808002/photo/2, accessed on August 18, 2021), where latest information about the PLA's activities is posted."）

5 先行研究として次を参照した。門間理良「緊迫化する台湾本島周辺情勢【１】－中国軍および米軍の活動実態－」『NIDS コメンタリー』No. 119 号、2020 年 6 月 4 日、防衛研究所；門間理良「中国軍機、台湾 ADIZ 進入規模を拡大」『東亜』No. 647、2021 年 5 月、霞山会、36-43 頁；門間理良「中国軍機が台湾防空識別圏に大規模進入」『東亜』No. 653、2021 年 11 月、霞山会、38-45 頁；門間理良「攻勢性を強める中国の軍事戦略と活発化する軍用機訓練飛行の関係」『NIDS コメンタリー』No. 172 号、2021 年 6 月 15 日、防衛研究所；門間理良「台湾による中国人民解放軍の対台湾統合作戦への評価と台湾の国防体制の整備」『安全保障戦略研究』第 2 巻第 2 号、2022 年 3 月、防衛研究所、1-22 頁。

観するだけにとどめるが、更に掘り下げるべき内容に関しては、今後のコメンタリーにて検討を重ねていくこととしたい。

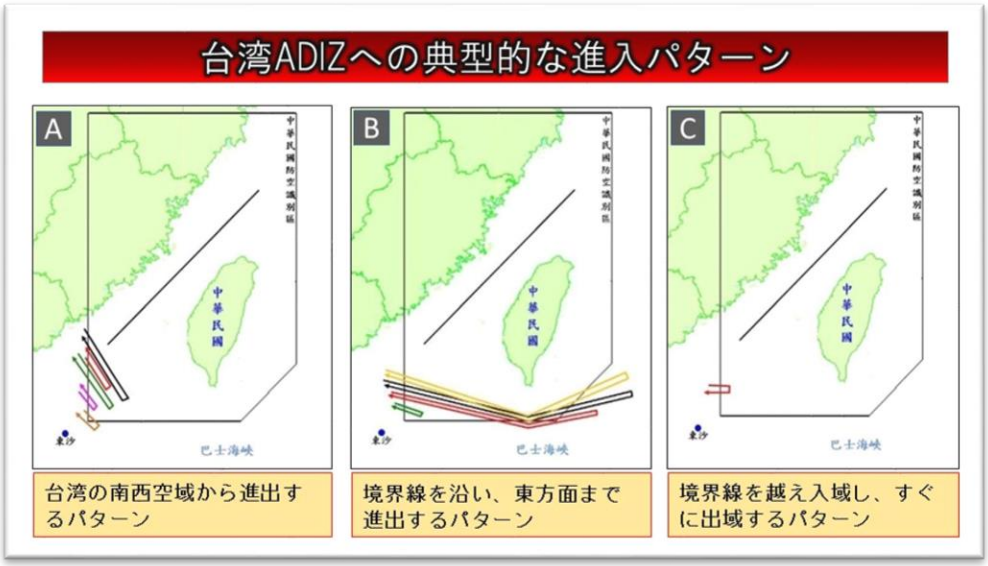
台湾 ADIZ 進入とは

そもそも ADIZ とは、航空機がその国の領空に到達する前に早期に識別することを目的に設定された空域のことである。そのため、航空機の航空交通の安全に供する目的において特別な識別および報告手続きに従わせることを主権国家が要求できるように規定されている。1950 年代に米国をはじめ日本や台湾も ADIZ を設定しているが、台湾 ADIZ を議論する際には歴史的な文脈を踏まえる必要がある。

図 1 のとおり、ほぼ長方形のように境界線で囲まれた台湾 ADIZ では、その一部が江西省にまで達するほど中国大陸の深くにまで及んでいることがわかる。台湾国防部は、1954 年の米華相互防衛条約が締結された当時の地図に基づいて、PLA 機による台湾 ADIZ 進入の状況をインターネット上で公開しているが、台湾が喫緊の課題として窮状を訴えているのは、図中の「中間線」よりも南側で、かつ境界線で囲まれた空域で生起している事象のことである。この「中間線」は、米国が台湾海峡を挟んだ中台の大規模な対立を防ぎ、かつ自制させる目的で設定した[6]。

では実際に、PLA 機はどのように台湾 ADIZ へ進入してくるのであろうか。台湾国防部のホームページによると、中国大陸の各飛行場から飛び立った PLA 機は、図 1 のように、様々なパターンで台湾 ADIZ に進入している。最も多い典型的なパターンは、図中 A のように、福建省南部沖の「中間線」の南側の空域から台湾南西部の空域に飛来し、反転した後に北上して大陸に戻るパターンである。

図 1　典型的な PLA 機による台湾 ADIZ 進入パターン



【出所】台湾国防部ホームページに基づき、筆者が作成した。

(https://www.mnd.gov.tw/PublishTable.aspx?Types=%E5%8D%B3%E6%99%82%E8%BB%8D%E4%BA%8B%E5%8B%95%E6%85%8B&title=%E5%9C%8B%E9%98%B2%E6%B6%88%E6%81%AF)

[6] Presentation for Habibie Center 30 Nov 2021, *China Aerospace Studies Institute*, Air University of U.S. Air Force, November 30, 2021, https://www.youtube.com/watch?v=SN-bSt7WRzI, accessed on September 7, 2022.

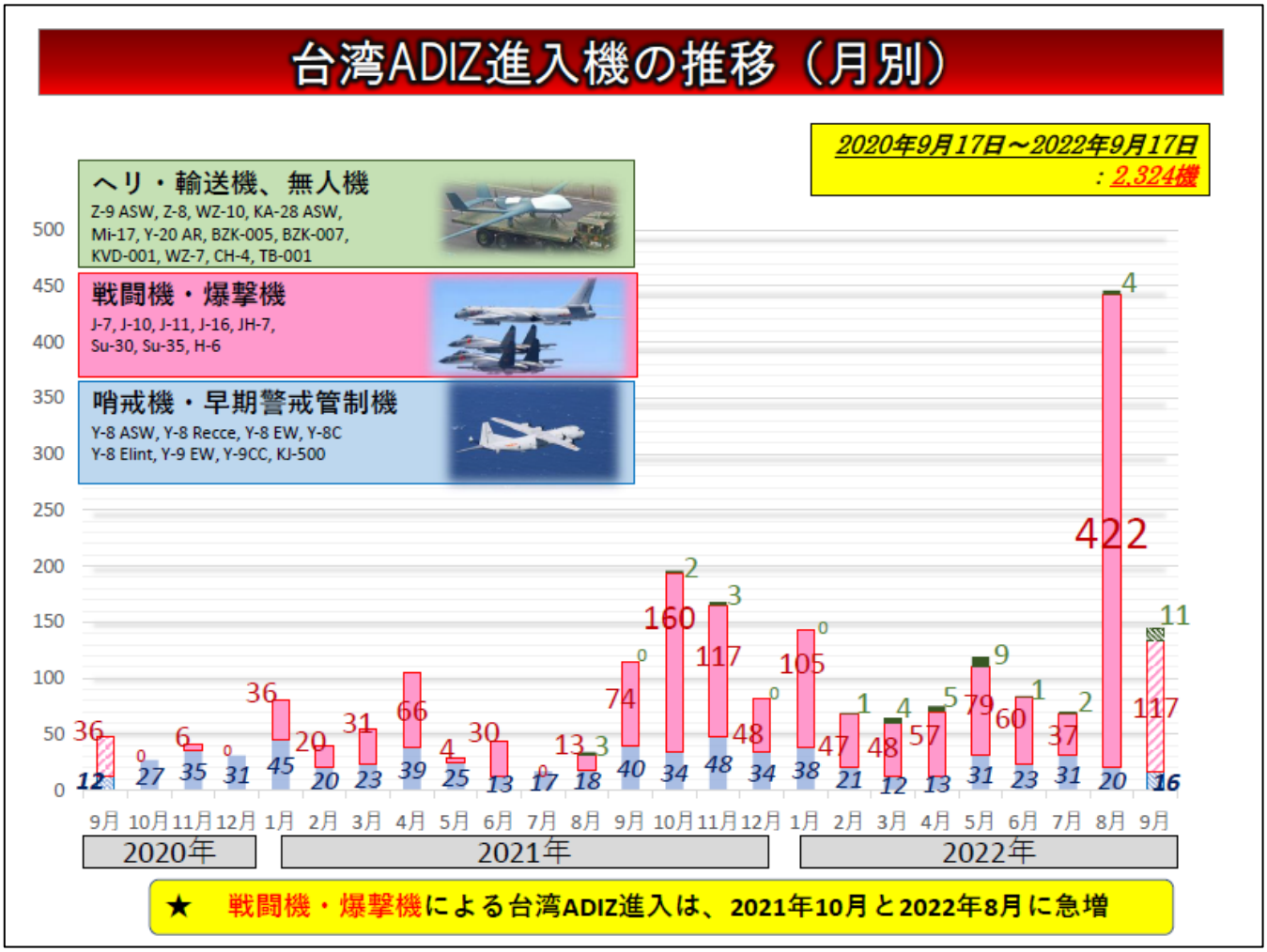
図中 B のように、台湾 ADIZ 境界線と必ずしも一致しないものの、南部の境界線に沿いながら台湾の東海上まで飛行し引き返すパターンもある。これら図中 A と B の進入パターンには、PLA 機が飛行する針路の延長線上に米海軍などの主要艦艇が航行していたケースもあり、PLA 機が編隊で飛行しながら対艦ミサイルなどの発射をデモンストレーションしていたものと考えられている。また図中 C のような進入パターンは、PLA 戦闘機に多く見られ、ADIZ 境界線を越え入域するとすぐに引き返し出域するケースも少なくない。

2 年間にわたる PLA 機の台湾 ADIZ 進入の状況とは

台湾国防部がインターネット上で公表をはじめた 2020 年 9 月 17 日から 2022 年 9 月 17 日に至るまでの 2 年間、PLA 機はどのように台湾 ADIZ に進入していたのであろうか。

全データを統計すると、台湾 ADIZ への進入機数は図 2 のとおりに推移しており、2 年間の総数は 2,324 機にものぼる[7]。本稿では概要を把握することに努めるため、多様な PLA の進入機をあえて①「哨戒機・早期警戒管制機」クラス（青色）、②「戦闘機・爆撃機」クラス（桃色）、③「ヘリ・輸送機・無人機」クラス（緑色）と大きくクラス分けし、細部機種については図 2 の中で示した。

図 2　台湾 ADIZ 進入機の推移（月別）



[7] 台湾国防部が公表したツイッター情報などを基に、筆者が集計・分析した結果である。（https://twitter.com/MoNDefense/status/1427571314487808002/photo/2）

【出所】台湾国防部ホームページの情報などを基に、筆者が集計・分析した結果である。当該月の 1 日から末日までの 1 か月間について集計を繰り返したが、当該月途中までの集計となる月においては斜線で示した。
（https://www.mnd.gov.tw/PublishTable.aspx?Types=%E5%8D%B3%E6%99%82%E8%BB%8D%E4%BA%8B%E5%8B%95%E6%85%8B&title=%E5%9C%8B%E9%98%B2%E6%B6%88%E6%81%AF）

このグラフを見れば、台湾 ADIZ に進入してくる PLA 機が次第に増加しているのが一目瞭然である。青色で着色した①「哨戒機・早期警戒管制機」クラスに関しては、月平均 27 機前後の機数で安定的に推移している。実際、最低 2 日に 1 回程度は Y-8ASW のような哨戒機が進入する傾向にあり、日常的なパトロール飛行を行っていることが伺える。

一方、桃色で着色した②「戦闘機・爆撃機」クラスに関しては、その進入時期が流動的である。2020 年 9 月以降、徐々に増加傾向をたどっていたが、2021 年 10 月に 160 機と急増し、また 2022 年 8 月に 422 機と急増した。これらの要因分析は、中国の軍事行動を考究する上において有益な視座を与えている。

台湾が公表をはじめた 2 年前の 2020 年 9 月 17 日を思い起こせば、米国務省クラック（Keith Krach）次官（経済成長・エネルギー・環境担当）が李登輝元総統の告別式（19 日）に出席するために台湾を訪問した際に[8]、PLA 機が 18 日に 18 機、19 日には 19 機と進入してきた。2020 年 9 月当時には、PLA 戦闘機が延べ 36 機ほど進入しただけで衝撃的なニュースとなっていた。

しかしながら、直近の 2022 年 8 月、米国のペロシ（Nancy Pelosi）下院議長が台湾を訪問したことを契機に、中国は台湾周辺で「重要軍事演習」を行い[9]、その演習の一環として戦闘機が多く活用された結果、延べ 422 機もの PLA 戦闘機が進入しており、その烈度は 2020 年当時をはるかに上回るものとなっている。

米国の政府高官等が台湾を訪問するたびに、あるいは米軍等が台湾周辺で活動するたびに、中国当局が「不満を表す手段」として②「戦闘機・爆撃機」クラスの航空機を進入させているが、2021 年 10 月に戦闘機の進入機数が 160 機と急増した背景には複数の要因が考えられる。

まず、直前の 9 月の米英豪による AUKUS 結成の公表があり、台湾政府による TPP 加入の表明もあった。また英海軍空母クイーンエリザベス号をはじめとする数か国の海軍艦艇による南シナ海での FONOP 活動や台湾近海での演習も一因として考えられる[10]。更に、中国の国慶節（10 月 1 日）と台湾の国慶節（10 月 10 日）の間に、中国が国力の差を見せつけたと捉えることもできるだろう。このように中国にとって政治的に敏感な情勢となれば、対抗する手段として、比較的に使い勝手の良いエアパワーを政治的に利用していると見ることもできよう。

③「ヘリ・輸送機・無人機」クラスに関しては、2021 年夏ごろから台湾 ADIZ に様々な機種がしばしば進入しはじめている。具体的には、2021 年 8 月 26 日には Z-9 ASW（対潜哨戒ヘリ）が、同年 11 月 28 日には Y-20AR（空中給油型輸送機）が、2022 年 9 月 5 日以降には BZK-005（偵察型無人機）などの無人機が、それぞれ進入している。

---

[8] このクラック訪台は 1979 年以降最も地位の高い政府高官の公式訪問であった。中国側は直前から猛烈に反発しており、PLA の戦闘機による「中間線」越えが複数生起した。これが契機となり、台湾国防部は PLA 機による台湾 ADIZ 進入状況をインターネット上で公開しはじめた。

[9] 「我軍在台島周辺海空域成功挙行実戦化総合演訓」『解放軍報』2022 年 8 月 5 日。

[10] “China warns UK as carrier strike group approaches,” *BBC*, July 30, 2021, https://www.bbc.com/news/world-asia-58015367, accessed on September 12, 2022.

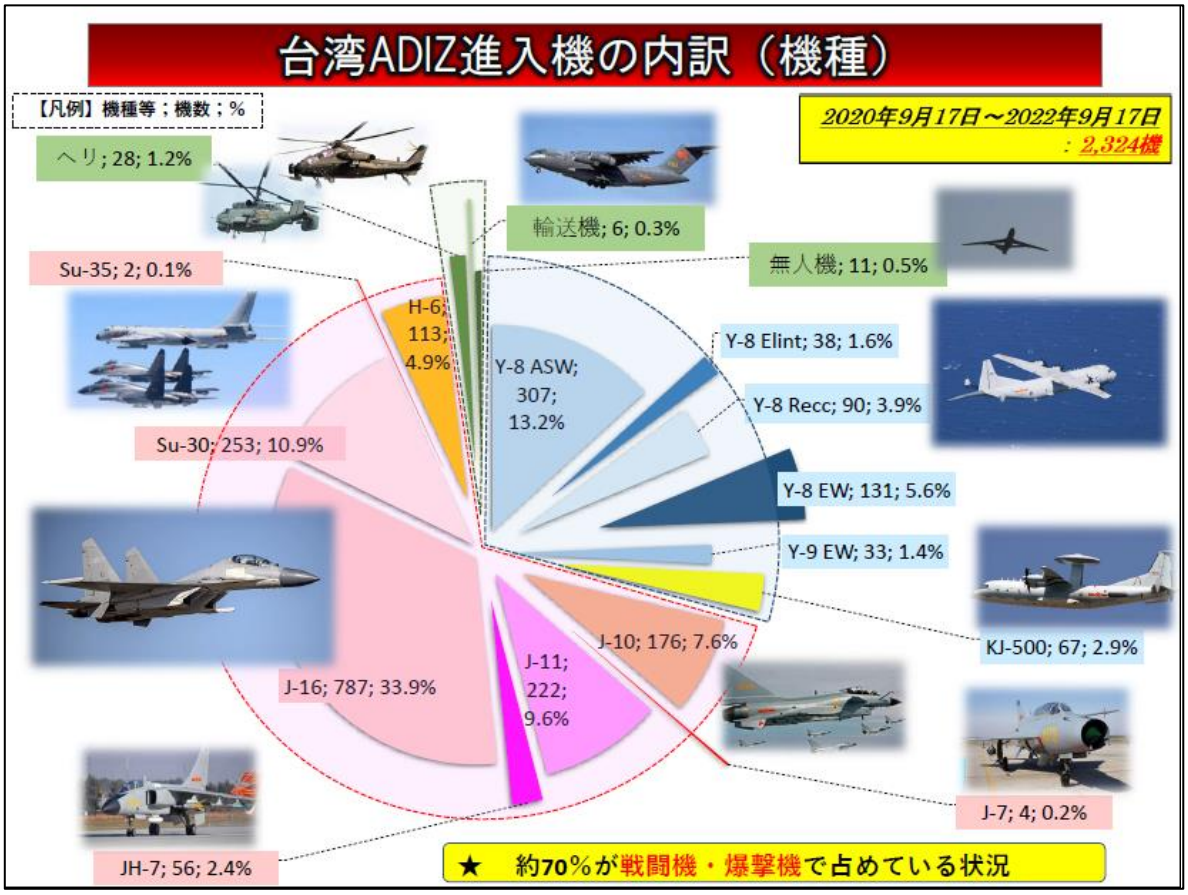
進入機の種類によって、何が予想できるのか

この 2,324 機にも及ぶ PLA 機の内訳は如何なるものだったか。

機種別に分析すると、①「哨戒機・早期警戒管制機」クラスが延べ 666 機（28.7%）、②「戦闘機・爆撃機」クラスが延べ 1,613 機（69.4%）、③「ヘリ・輸送機・無人機」クラスが延べ 45 機（1.9%）という内訳になった（図 3 参照）。

青色で囲んだ①「哨戒機・早期警戒管制機」クラスの細部内訳では、Y-8ASW（対潜哨戒機）が 307 機と最も多く、Y-8EW（電子戦機）が 131 機、Y-8Recce（偵察機）が 90 機、KJ-500（早期警戒管制機）が 67 機、Y-8Elint（電子偵察機）が 38 機、Y-9EW（電子戦機）が 33 機などと続いている[11]。概して言えることは、Y-8ASW が「哨戒機・早期警戒管制機」クラスの大半を占めており、中国が敵対勢力の潜水艦の動向を気にしていることが伺える。一方で、2022 年 3 月にベトナム近海で Y-8ASW が墜落し、飛行再開されるまでの約 2 か月間、Y-8EW がその穴を埋めるかのごとく頻繁に飛行していたことから、同機種の能力を評価していくうえで興味深い。

図 3　台湾 ADIZ 進入機の内訳（機種）



【出所】台湾国防部ホームページの情報などを基に、筆者が集計・分析した結果である。

（https://www.mnd.gov.tw/PublishTable.aspx?Types=%E5%8D%B3%E6%99%82%E8%BB%8D%E4%BA%8B%E5%8B%95%E6%85%8B&title=%E5%9C%8B%E9%98%B2%E6%B6%88%E6%81%AF）

次に、桃色で囲んだ②「戦闘機・爆撃機」クラスのうち戦闘機だけで分析すると、J-16 が 787 機と最も多

[11] これまで Y-8C と Y-9CC が各 1 機進入しているが、集計作業上、Y-8EW と Y-9EW にそれぞれ計上した。

く、Su-30 が 253 機、J-11 が 222 機、J-10 が 176 機、JH-7 が 56 機、J-7 が 4 機、Su-35 が 2 機と続いている。また、戦略爆撃機である H-6 を分析すれば、延べ 113 機も台湾 ADIZ に進入している。興味深いことに、H-6 が進入するタイミングは、米海軍艦艇が台湾周辺を航行するタイミングと概ね符合しているようである。

重要な点は、台湾 ADIZ に進入する戦闘機の半数以上が J-16 という事実である。なぜ、J-16 が進入した戦闘機の大半を占めるようになっているのかは、十分に分析を重ねていく必要がある。その際、電子戦に関する運用試験に一定の目途がついたのか[12]、電子戦仕様の J-16D も踏まえねばならない。そもそも J-16D は 2021 年 9 月末の珠海エアショーで初公開されたのだが[13]、J-16D が台湾 ADIZ に進入したと台湾国防部が公表したのは、2022 年 1 月 24 日に 2 機、1 月 31 日に 1 機及び 4 月 10 日に 1 機の延べ 4 機にすぎなかった。しかしながら、J-16D がそれ以前から台湾 ADIZ 進入していた可能性が高いと考えるべきである。

台湾軍が初めて J-16 を検知したのは、Y-8EW の 1 機、J-16 戦闘機の 2 機、J-7 戦闘機の 4 機が編隊飛行によって連携しながら台湾 ADIZ に進入した 2021 年 6 月 17 日のことであった。当時、J-16 が初めて進入したことや旧式の J-7 戦闘機が実のところドローン化されているのではないかなどの憶測も飛びかった[14]。一方で、台湾空軍の元副司令でもあった台湾清華大学名誉教授の張延廷（Zhāng Yántíng）が、中国が J-7 のような第 3 世代機を台湾 ADIZ に進入させたということは、台湾の第 4 世代戦闘機を恐れず、電子戦に対する中国の自信を示しているのだと指摘している[15]。つまり航空作戦の専門家の視点では、この 6 月 17 日に進入してきた PLA 機編隊の連携要領から、PLA が電子戦を念頭に置いていると洞察しているのである。

これは一例にすぎないが、これまでも Y-8EW や Y-9EW のような電子戦機と連携しながら J-16 が飛行していたケースが多々あったことから、2 年間で延べ 787 機が進入してきた J-16 のうち、一定数を J-16D が占めていたと考えて差し支えないだろう。このことは将来の台湾有事における戦闘様相がどのようなものになるのかを示唆していると言えるのである[16]。

別の観点から、J-16 による台湾 ADIZ 進入が急増した要因を検討してみよう。西側諸国の議論では、中国のジェットエンジンは短命であり、性能が悪いと酷評することが多い。しかしながら、それらの指摘はいささか 10 年近く前の議論を論拠としているように感じられる。現実には、この数年で PLA のジェットエンジン事情は徐々に改善してきているようである。中国メディア『東方網』の報道内容のとおりならば、2020 年頃からロシア製ジェットエンジン AL-31 に代わって、信頼性を高めることができた中国国産の「太行（tài xíng）」エンジン（ターボファン／WS-10）が、J-11BS、J-16、J-11B などの戦闘機に対して換装されてきた（原文：歼-11BS、歼-16 以及部分歼-11B 开始都使用国产太行发动机）[17]。

---

12 「殲-16 罕見携両種吊船出撃：低空導航+電子対抗極具実戦意味」『東方網』2021 年 5 月 16 日、https://www.sohu.com/a/466752005_120823584?scm=1004.783297762342141952.0.0.1, accessed on May 17, 2021.

13 「軍事飛行訓練国際交流会議 2021 挙行」『解放軍放』2021 年 9 月 28 日。

14 「殲-7 为何伴随殲-16 巡邏？是无人机还是新型戦机？答案在这里了」『勝訊網』2020 年 6 月 18 日、https://new.qq.com/omn/20210618/20210618A01NLK00.html, accessed on July 21, 2021.

15 「台湾防務部門：今天 7 架次解放軍軍机進入台湾西南空域，包含殲-7 戦机」『環球網』2021 年 6 月 17 日、https://taiwan.huanqiu.com/article/43ZsHJx4qxq, accessed on October 7, 2022.

16 CCTV「国産新型電子戦飛飛机殲-16D 已投入実戦化訓練 進一歩提高空軍電子進攻能力」『国防軍事頻道』2021 年 11 月 7 日、https://tv.cctv.com/2021/11/07/VIDEzcnf3rePEFpRiFikcQMv211107.shtml, accessed on May 17, 2022.

17 夏阳「太行版殲-10C 列装解放軍 国産三代半戦机実現 100%中国制造」『東方網』2021 年 5 月 12 日,

しかし重要な点は、この新しい「太行」エンジンが、シングルエンジン戦闘機である J-10 にも、2021 年 5 月から換装がはじまっている事実であろう[18]。2020 年 9 月から 1 年以上も進入実績が低調であった J-10 が、2021 年 11 月以降に、毎月必ず一定数が進入している背景には、信頼性を高めたジェットエンジンに換装した事情があるからではないだろうか。これら事象が時期的に符合していることは単なる偶然とは考えられず、中国の国産ジェットエンジンの信頼性向上が、より一層多くの PLA 機による洋上での飛行を可能にさせ、結果的に J-16 だけでなくシングルエンジンの戦闘機まで、より多く進入させていることに繋がっているのだろう。

最後に、緑色で囲んだ③「ヘリ・輸送機・無人機」クラスの細部内訳であるが、Z-9ASW、Z-8、WZ-10、KA-28ASW などのヘリが延べ 28 機、Mi-17 や Y-20AR などの輸送機が延べ 6 機、BZK-005、BZK-007、KVD-001、WZ-7、CH-4、TB-001 などの無人機が延べ 11 機、それぞれ台湾 ADIZ に進入していた。

注目すべきは 2022 年 9 月 5 日以降、さまざまな中国の無人機が台湾 ADIZ に進入している傾向にある。この著しい変化は、なんらかの意思決定が下された結果と考えて差し支えないのだろうが、中国が考える局部戦争の概念が AI を融合しながら無人機が自律して攻撃していく「智能化戦争」に移行しつつあるなか[19]、実際に無人機の活動が増えつつあることを、特に注視せねばならない。

おわりに

本稿では、この 2 年間においてどのような PLA 機が台湾 ADIZ へ進入していたのかを概観した。今回のように、月別で集計・分析すると、PLA 機による台湾 ADIZ 進入は増加傾向にあり、米国や台湾の動向に対して中国が政治的に敏感となった場合、特に戦闘機を進入させていると解釈できる。更に言うならば、（かつて、湾岸戦争以降の米国政府が重用しはじめたように、）中国はエアパワーを政治的に利用しはじているのかもしれない。

電子戦能力が一段と高い J-16D を含め[20]、多くの J-16 が活用されていることを鑑みれば、将来の台湾有事が起こった際に、PLA が電子戦環境下で戦闘することを念頭に置いていることと理解すべきだろう。

一方、無人機が活用されつつある傾向や「中間線」を超える PLA 機が急増しつつある傾向は、中国の軍事行動を議論していく上で重要な指標となりえるため、今後のコメンタリーにてより一層細かな分析を重ねていくこととしたい。

（2022 年 10 月 26 日脱稿）

---

https://n.eastday.com/pnews/162081638877015007, accessed on 14 May 2021；この数年間における太行エンジンの発展が、2022 年 11 月 12 日現在、珠海エアショーで展示されているスラスト・ベクタライズド・ノズル付きのジェットエンジン（WS-10TVC）に繋がっているものと考えられる。Liu, Xuanzun and Cao, Siqi, “China exhibits fighter jet engine with 2D thrust vectoring control nozzle,” *Global Times*, November 10, 2022, https://www.globaltimes.cn/page/202211/1279221.shtml, accessed on November 12, 2022.

[18] 同上。

[19] 相田守輝「中国の無人機 TB-001 が弾道ミサイルの着弾に関与していた可能性について」『NIDS コメンタリー』No.239、2022 年 10 月 4 日、防衛研究所、13 頁。

[20] “Aircraft: China,” *Jane’s All the World’s Aircraft: Development & Production 2022 - 2023,* Jane’s Group UK Limited, 2022, pp. 157-158.

プロフィール profile

地域研究部

米欧ロシア研究室

2 等空佐　相田　守輝

専門分野：中国をめぐる安全保障

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課
直　通 ： 03-3260-3011
代　表 ： 03-3268-3111（内線 29177）
F A X　： 03-3260-3034
※ 防衛研究所ウェブサイト：http://www.nids.mod.go.jp/